

死者の声を聞いた事がある。

二十年前、私はとだ勝かつ之のさんの漫画アシスタントをしていた。とださんは私たちをあるとき、岩手県に旅行に連れて行ってくださった。夕方に花巻温泉の宿に着くと、窓から時報の音楽が流れ込んできた。宮沢賢治の作曲した「星めぐりの歌」だと気づいたとき、耳もとで「来て良かったろ」と声がしたのだ。

● 六年前、漫画家になった私は戦時中の呉市の生活を描いていた。故郷でない街の、生まれていない時代の、経験していない辛さを、体験者も読むことを想定して描くのは難しかった。編集さんは「漫画家なら想像力で何とかするものでしょう。軍艦や零戦が描きたくて仕方ない方だっているんですよ」と言った。そう言われると確かに私には才能がない気がした。取材で泊まった呉の宿で、思わず「あー孤独じゃ」とつぶやいた。すると「おいでや」と声がした。十数年前亡くした祖母の声だった。見ると『和英対照 仏教聖典』という本が置いてある。開いてみたら、こう書いてあった。

「目を開けばどこにでも教えはある。同様に、さとりへの機縁もどこにでも現れている」

そうだった。辛いならやめればいいのに、

東北への「機縁」を繋いで

こうの史代

kouno jumyo



描かずにはいられないのだった。私は悲しいお話も兵器も近現代史もちつとも好きでない。

ただ、漫画を描けるということと、祖母の生きた街の物語だということが、作品の芯への「機縁」なのだ。そう気づくと、導いてくれる何かはこの世界に無数に漂っているように思えた。

● 二年前の三月、東日本大震災が起った。東京はうらかな午後だった。何分も揺れた後、一転して黒雲が厚く重なり、雪が降り出しそうなほど冷え込んだ。テレビをつけて、「もう昨日までの日々は戻ってこないのだ」と思った。電話もやがて繋がらなくなった。牛乳や肉やさまざまのものが手に入らなくなった。紙もインクも工場や倉庫がやられて、印刷業界は壊滅だと噂された。私の暮らす東京は、東北地方から食料や人材や電気までを得て成り立っていたのだ、と思い知った。

翌月、とだ勝之さんが「仙台空港に飾る絵を描かない？」と誘ってくださった。すぐに模造紙を買ってきて、刷毛^{はけ}でいっぱい絵を描いた。漫画仲間が描き上げた絵は、夏には併せて三十枚ほどになり、仙台空港だけでなく東北各地の空港を巡ることになった。ついに行つては、サインや似顔絵を描いた。

八月は花巻空港だった。前日は宮沢賢治の誕生日、翌日は祖父の命日だった。二十年前、釜石の大観音にお参りしたことを思い出した。「わしの命日を口実に行つて見たらええ」と

祖父の声がした。釜石まで足を延ばすことに決めた。年末にはもう、何の口実も作らず気仙沼を訪れるようになっていた。岩手の言葉は丸っこかった。宮城の町並みは半壊でも美しかった。福島の際はきらめいていた。南三陸町の人は言った、「とにかく来ていただきたい。この町を知つてくさい」。

● そして去年の三月、企画を週刊誌に持ち込んで、被災地の絵に短文をつけた小さな連載「日の鳥」を始めた。宮沢賢治を愛したこと、東京に暮らしたこと、漫画を描く手と尊敬する漫画仲間をもつたこと、祖父の声を聞いたこと。か細い「機縁」を繋いで、みつともなく足掻いて、わたしは少しずつ東北に近づいた。

● 昨日は祖母の命日だった。死に近い祖母はたった一度、病の重みに耐えかねて「もう生きとくないよ」と言った。その後の祖母は、ただ私たちと笑い合う瞬間のためだけに生き抜いてくれたのだと、今は判る^{わか}。そうだ。私は生き抜く尊さを祖母から教わった。だから戦争だつて描こうとしたし、東北に恋してしまつたのだ。

● 今も呉に宿を取るたび『和英対照 仏教聖典』を開いてみるのだが、その「機縁」の頁には、以来、たどり着いたことがない。でも「確かにあった」と記憶している。私に聞こ

える死者の声は、ただの思い込みだ。でも「聞こえたと思う」のは私の自由だ。

賢治や祖父母の声と共に私があるように、誰にも、愛した誰かや街の記憶、風の歌、空の色が宿っている。震災で死んでしまった人は大勢いたけど、生き延びた人はもつと多い。今、みんな何を宿してどうやって生き抜いていますか。たぶん私は、ただそれを知りたいのだ。

● 「東北の人は我慢強いから、いつも黙っている。求めることをもつと発言してくれればいいのに。そうしたら私たちはもつと助けになれるはずなのに」という声を何度も聞く。

しかし考えてみれば、東北の人に限らず私たちは、何ができるか判らない、誰とも判らない人に、自分の望みを打ち明けたりしないものだ。いちいち整理して願ひ事を語る労力など費さないものだ。本当に声を聞き取ろうとするならば、せめてその人のほうを向いておこう。どんな小さなささやきも、瞳の色も逃さないように、耳と目を凝らし、心を澄ましておこう。そして、たとえ思い込みでも勘違いでも、受け取つた何かは「機縁」のひとつなのだと思う。

(このふみよ・漫画家)
著書に『ほおるべん古事記』平凡社